設楽発掘通信

No.11
平成２７年
７月号

笹平遺跡発掘調査地元説明会を開催します

この春から設楽地区の笹平遺跡の発掘調査を担当しています蔭山誠一です。

笹平遺跡の調査は、五月の下旬から表土掘削を行い、六月から作業員さんも入り、遺構の検出作業とその掘削作業をしています。

この遺跡は、以前から縄文時代の土器や石器が多数みつかって、よく知られている遺跡で、設楽町奥三河郷土館に、笹平遺跡から出土した遺物が多数展示されています。

この度の調査においても、縄文時代後期～弥生時代前期の土坑や埋設土器が確認でき、縄文土器、岩版、石冠、磨製石斧、打製石鏃などが多数みつかりました。特に岩版は、人形を石で作ったもので、笹平遺跡では二例目の発見となりました。**そこで笹平遺跡の前半の調査成果について、八月八日の土曜日午前十一時から、現地における地元説明会を計画しました。**

是非、この機会に縄文時代の文化に触れてみませんか。皆様のお越しをお待ちしております。

尚、当日は真夏の暑い時節で、発掘調査現場は足場が多少悪い箇所もあります。熱中症や転倒などの予防のため、皆様各自にて帽子・靴などのご用意を宜しくお願い申し上げます。

（愛知県埋蔵文化財センター　蔭山誠一）

笹平遺跡地元説明会 会場のご案内

8月8日（土）午前11時から、発掘現場で開催予定です。
お車でのご来跡の際は、設楽大橋西詰付近までお越し下さい。当日、係りの者が駐車場をご案内いたします。
＊開催の詳細・お問い合わせは、愛知県埋蔵文化財センター調査課（電話 0567-67-4163）、鈴木正貴携帯（080-1571-4982）、あるいはホームページ（http://www.maibun.com）をご覧下さい。

写真１　笹平遺跡でみつかった岩版

笹平遺跡の発掘調査

笹平遺跡の発掘調査が始まって早くも二ヶ月が経とうとしています。調査の便宜上、笹平遺跡では調査区を三分割（15A～C区）して作業を進めていますが、六月のうちに15A区の調査を完了して、現在は15B区の調査を進めているところです。段々と暑さが増してきていますが、作業員さん達の精力的な作業のおかげで、日々成果をあげております（写真2）。

15A区は、調査区の西側に位置しており、境川が曲折する箇所に面した低地部になります（写真3）。特筆すべき遺構はみつかりませんでしたが、平坦部である15B区との境部分には岩盤が露出し、切り立つように下に潜り込んでいく様子が確認できました。それを埋めるように土砂が堆積して形成された斜面からは、縄文時代の様々な遺物が出土しました。

主なものを紹介しますと、弓矢（狩猟具）として用いられる石鏃（写真4）、伐採具や土掘具として用いられる打製石斧や磨製石斧、ドングリなどを砕いたり、すり潰す際に用いられた石皿と叩石があります（写真5）。また、縄文土器の破片も多数みつかっています。中でも縄文時代晩期（約三千年前）の大洞式（亀ヶ岡式）と呼ばれる土器は、東北地方を中心に分布する縄文時代を代表する土器の一つです。これが東北地方から持ち込まれたものなのか、影響を受けた別地域で作られたものなのか、考えると想像がふくらみます。

これらは縄文時代の遺跡から出土する代表的な遺物といえるのに対して、具体的な用途が特定しづらい特殊な遺物もみつかっています。岩版（前頁、写真1）や石冠と呼ばれるものですが、第十号で紹介しました石棒と同じ呪術具と考えられています。出土例もあまり多くなく、縄文時代の人々の精神性を考える上で重要な遺物といえるでしょう。

これら15A区から出土しました遺物は、上にある平坦部（15B区）から何らかの原因で流れ込んできたものと考えられます。つまり15B区が主な使用の場と考えられ、遺物の内容をみても、集落の外で使用する狩猟具だけでなく、集落の中で使用する日常の生活道具や、普段外には持ち歩かないであろう特殊な遺物も多数みつかっていることから、今後住居跡などの集落を構成する遺構がみつかる可能性がますます高くなりました。（株式会社二友組　鷺坂有吾）

写真４　石鏃出土状況

写真２　作業風景

写真５　石皿・叩石

写真３　15 A区全景（南東から）

川向東貝津遺跡の発掘調査

川向東貝津遺跡の調査は、全体のおよそ四分の一ほどの範囲まで調査が進んでいます。調査の進行に伴い、遺跡の姿が徐々に見えてきました。

現在のところ、竪穴建物と考えられる遺構が五棟見つかっています。特に調査区西側中央付近の竪穴建物では、石囲炉が非常に良い状態で出土しました（写真6）。また、別の竪穴建物でも壊れた状態の石囲炉が見つかっています。石囲炉とは、読んで字のごとく石で囲って作られた炉のことで、縄文時代中期ごろによく見られます。中に土器が入っていることもありますが、今回は見つかっていません。

この他にも、多量の大きな石がまとまって見られるものや、熱を受けて土が赤くなっている様子が観察できるものなど炉の存在をうかがわせる遺構が複数見つかっています。

現在までに出土している遺物は、大きく分けて二つの時期に分けられます。ひとつは縄文時代中期～後期（およそ五千五百～四千年前）の土器です。竪穴建物からも同様の土器片が多く出土しており、前号でもお知らせした埋甕（写真7）の時期も縄文時代後期のものであることが分かりました。ただし、出土している土器の時期は古いものと新しいもので約一千年もしくはそれ以上の差があり、少なくとも二時期の集落が存在する可能性が出てきました。

もうひとつは縄文時代草創期（一万年以上前）以前の石器です。今回の調査では石器や石器の可能性のある礫が数多く出土しています。その中には前述の土器と同様の時期と考えられるものもありますが、より古い特徴を持つ石器がいくつか見られます。たとえば、尖頭器（写真8）や縦長剥片（写真9）と呼ばれる石器です。これらの石器と同時期といえる遺構（建物など）は今のところ見つかっていませんが、こうした古い時期から周辺に人々が暮らしていた可能性が考えられます。

調査はまだ途中ですが、すでに様々な成果が上がっています。今後の調査では、遺跡の規模がより明確になってくるかと思いますので、ご期待ください。

（株式会社二友組　岩瀬大輔）

写真８　尖頭器出土状況

写真６　石囲炉断面

写真９　縦長剥片

写真７　埋甕出土状況

平成二十七年度範囲確認調査

昨年度に引き続き、五月より範囲確認調査を行っています。今年度の調査予定は表1です。対象遺跡は大名倉遺跡以下の十二遺跡、試掘面積は一五〇〇㎡、調査場所によって数は変わりますが、約五〇〇ヶ所にトレンチを掘りさげる予定です。

範囲確認調査は遺跡の有無と広がりを確認するもので、対象遺跡の面積などに応じて一定割合の数、面積の四角い穴を重機などを使用して掘りさげます。トレンチとはこの四角い穴のことです。遺物の分布調査結果と遺跡の地形などに対応した調査方法をとります。現在とっている標準的な方法は、平面一m×二mの長方形のトレンチを遺構のある土層まで掘りさげるものです（写真10）。これによって、遺構および遺物の有無を確認します。検出された遺構は写真と実測図で記録します（写真12・13）。遺物は層位ごとに記録し、取り上げます。また、トレンチの土層も写真と実測図で記録します。この記録データは本調査の資料として報告書にまとめられます。

これまで、大栗（おおぐり）遺跡、万瀬（まんぜ）遺跡、大名倉（おおなぐら）遺跡、日掛（ひかげ）遺跡の調査を終了し、この結果から東海地区の縄文時代の遺跡として有名な大名倉遺跡（写真11）の広がりなどが確認されています。（愛知県埋蔵文化財センター　酒井俊彦（さかいとしひこ））

表1　範囲確認調査遺跡
（調査時期は予定です）

遺跡名	試掘面積	トレンチ数	調査時期
大名倉遺跡	88㎡	26	5～6月
日掛遺跡	52㎡	26	6月
西地東地遺跡	10㎡	5	6月
ハラビ平遺跡	60㎡	18	10月
大名倉丸山遺跡	84㎡	42	11月
上戸神遺跡	10㎡	4	11月
大栗遺跡	170㎡	19	5～6月
万瀬遺跡	16㎡	4	5月
大畑遺跡	530㎡	211	6～8月
向橋遺跡	140㎡	39	10月
永江沢遺跡	76㎡	34	10月
添沢遺跡	264㎡	77	9月
計	1500㎡	505	

写真 10　大栗遺跡掘削作業

写真 11　大名倉遺跡調査風景

写真 13　万瀬遺跡写真撮影

写真 12　日掛遺跡測量作業

設楽発掘通信
No.11
平成27年7月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話　（0567）67-4161【管理課】　4163【調査課】
ホームページ　http://www.maibun.com
Facebook　https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter　https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　株式会社 二友組